

見えたら終わり

ムリエル・オルタ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

マトモな精神状況じゃなかったんじゃないですかね？（そ知らぬぶり）

目次

見えたら終わり

「はあ、はあ、はあ……」

走る、走る、走る。真夜中の町中を一心不乱に走る。何かから逃げられる様に。恐ろしいものから逃れるために。ただ、走り続ける。周りの風景なんて気にも留めずただ走り続ける。

「ああ、あああああああー」

口からは言葉が出てくることは無く、ただ悲鳴じみた叫び声が漏れるだけだ。どうしてこんなことに……。逃げる中、ただそんな考えが浮かぶ。自分の居場所に足を踏み入れた存在を、いつも通りに、ただそれだけなのに。その存在を認識した瞬間から恐怖で泡立つ。見てはいけない存在、月明りに照らされるソレに恐怖を抱く以外の感情は無かった。

少し前までの気概も何もかも遥か彼方に消えてゆき、ただ、後ろを振り返らない様に意識しながら逃げるだけ。狩る側から、狩られる側になってしまっただけの話。冷や汗が流れる。どうして、どうして。答えのない考えが頭の中を掻き乱す。いつもと同じように、日常のルーティーンを繰り返すだけだった筈なのに。

自問自答に背後から迫る死の恐怖に気が付かなかったが、いつの間にかどこか遠くに来てしまったようだった。普段は居場所から呼ばれ、這い出ている為地理なんて分からない。しかし、こんな腕の複数ある化け物の銅像なんて存在するのだろうか。

大きな刃物を振り回す巨漢、片手には松明を持ち片手に刃物を持つ顔の見えない男性。何処からともなく聞こえてくる笑い声、蠢く影。此処は何処だろう。此処は知っている場所だろうか？カッーン、カッーンと背後から音が聞こえる。逃げなくては、逃げて逃げて、何処か安全なところに。

安全なんてどこにあるの？

恐ろしい子どもがやってくる。赤子に良心を期待することは出来ない。逃げなくてはいけない。かつて感じた恐怖が、腹の底から這い出てくる。素足に石の道は冷たく感じる。冷たく感じる？感覚は既

おいしいおにくがほしいのしんせんなおにくたべたいたべたいっぱいおなかがふくれるくらいあつたかいどはさむいつめがはかれるのがかわいたたすけておかあさんおとおさんだれもこないのだれもみてくれないのだれもきづいてくれないのしにたくないしにたくないしにたくないしにたくないしにたくないしにたくないしにたくない

「あつ」

きれいなおほしさまみえてるきれい

くく

これは哀れな怨霊のお話。ただの怨念が負の感情により受肉し、人間の魂を貪り喰らう怨霊に変わり、面白半分で召喚した人間を貪り喰らう日々を送っていた彼女の身に起きた悲劇の話。

呪いの儀式、恐ろしい血、広まる菌、様々な因果が重なる丑三つ時に迷い込んだ彼女は、その特異性が災いし、自らの体を獣へと堕とした。当然、それを狩る存在が居る訳だ。しかし、彼女は元々の存在が人間ではない。いや、人間だったがその後変質したといった方が正しい。

三次元に存在する人間と言う物体が死ぬことよって四次元に行く。しかし、人々の負の感情、本人の怨念も重なり天文学的数字の確立の壁を越えて爆誕した怨霊である彼女は一足飛びに獣の上、それより上位の存在になってしまった。しかし、それは生まれて間もない赤子。

他者との隔絶した能力差はあるものの、実戦経験の無い彼女は狩猟者にとって処理するのは造作の無いことだった。唯一の誤算としては、すばしっこく狩猟者の姿を見れば一目散に逃げる事。それが何故なのか、狩猟者は知らない。そもそも、ただの処分対象にそこまで考える人間の方が稀なのだろう。

今宵の夜の犠牲者はそんな哀れな怨霊。次は、一体誰がその身を墮とすのだろうか。